

# 北海道民が総活躍できる地域社会づくりに向けたひきこもり予防体制の確立に関する研究

北海道医療大学大学院 看護福祉学研究科博士後期課程 米田 政葉  
北海道医療大学大学院 看護福祉学研究科教授 志渡 晃一

## I 章 緒言

我が国におけるひきこもりの定義は「様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には 6 ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念である。なお、ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病性の現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低くないことに留意すべき」（厚生労働省、2010）とされている。推計数は約 54 万名（内閣府、2016）である。

ひきこもる主なきっかけは、いじめや不登校、就職活動の失敗、職場における挫折体験である（高畑、2003；内閣府、2010；土岐他、2011）。また、ひきこもる理由が不明である群も一定程度存在する（内閣府、2010）と述べられており、誰もがひきこもり状態になり得る状況である。さらに近年では、8050 問題に代表されるように、ひきこもり期間の長期化や高齢化にともなう問題の深刻化による当事者および家族の社会的孤立が社会問題となっており、ひきこもり一次・二次・三次の各視座からの予防策の構築は喫緊の課題である。

斎藤（1998）はひきこもりの原因について個人、家族、社会の三つに分けられることを指摘し、通常の状態ではこれらが接点を持ち機能しているが、ひきこもり状態（ひきこもりシステム）ではそれらが解離し、相互的なコミュニケーションが断絶していると述べている。中垣内（2004）は高度経済に共通する病理と日本社会固有の病理の視点からひきこもりについて検討し、戦後産業社会の中核である中産階級に生じた親子の病理であると共に、豊かな社会の中で関係性の貧困が進むという孤立の病理であること、変動期の社会における人生の決定や社会参加から退却する現代青年の病理であることを指摘している。小川（2012）はひきこもりをもたらす病理について、ナルシスティック・スキゾイドタイプと軽微アスペルガーの系列の 2 つがあり、両系列とも幼少期に父親の不在や暴力的態度、母親のコンテイング機能不全などのトラウマ的家庭環境が遠因となり発生していること、ナルシスティック・スキゾイドタイプのひきこもりの形成には母親のコンテイング機能の不全における心的退避が影響している可能性を示唆している。また、近藤（2004）は広汎性発達障害が原因となるケースも少なくないことを指摘している。

諸外国におけるひきこもりの特徴についてみると、García-Campayo. J, et al. (2007) は、スペインのひきこもりについて、家族の経済レベルが高いこと、本人が被害妄想を持

っていること、社会的内向性が高いことなどを指摘している。また、今後ひきこもりについて文化依存症候群から経済依存症候群へと転換する可能性を示唆している。Yoon. L. J, et al. (2015)によると、韓国におけるひきこもり傾向を示すものの特徴について、抑うつ的であり、不安感受性が高く、社会回避傾向にあることを指摘している。

ひきこもりが身体に与える健康影響について、ひきこもっているものは他のものと比べ高血圧の発生率が高く、心血管疾患のリスクが高いこと (John W. M. Yuen, et al. 2018)、う蝕等の歯科疾患のリスクを高める可能性 (小松崎他、2013) があることが指摘されている。精神的影響について、小山他 (2007) はひきこもりの精神病理についてひきこもり経験者の 6 割が生涯において気分障害、不安障害などの精神疾患の診断基準を満たす状態にあり、4 割がひきこもり期間中に何らかの精神疾患の診断基準を満たす状態にあったと報告している。

ひきこもり期間の長期化による影響について中垣内他 (2010) は、心身の疾病や障害の発生、知的能力や社会スキルの低下が起こることを報告している。野中・境 (2014) はひきこもり状態が心身のクオリティ・オブ・ライフ (Quality of Life : 以下、QOL) の低下に影響することを指摘している。

これらのことから、「ひきこもり」と呼ばれる現象は、人口減少が進み地域の担い手が不足しつつある北海道における貴重な人的資源の損失に他ならず、それを未然に防ぐとともに早期に発見し支援に繋げることが北海道の開発にとって急務である。しかし、これまで行われてきたひきこもりに関連する研究の多くは事例研究あるいは横断的研究であり十分にエビデンスがあるとは言い難い。さらに中地 (2010) も指摘する通りひきこもりを予防するという観点からの研究はほぼ行われていない。

支援に目を向けると竹中 (2009) は本人および親の年齢層やひきこもり状況に応じた多様なニーズへの支援が必要であると述べており、年齢の低い群では社会生活支援、就労支援が重要課題であるが、年齢が高くなると親の経済的困難や健康不安などを視野に入れた支援が重要課題となるとしている。福榮他 (2015) は生物心理社会的立場からの多次的なアプローチが必要であると述べている。さらに、包括的アセスメントを行うことができ、社会資源の利用を含む支援につながり、多職種・多機関がかかわることで支援の継続性が担保されやすいことから、多職種によるチームアプローチが有効であることを指摘している。土岐他 (2011) は精神保健福祉センターを受診したものを対象に行った調査の結果から、睡眠覚醒リズムの修正や父親との葛藤の関係の修復が本人の来所につながる可能性があることと述べている。立脇他 (2011) は、ひきこもり本人が直接相談に行くことが困難であることが指摘されていることから、電子メールによる相談について検討した。電子メールによるひきこもり本人からの相談が 57%を占めていると報告しており、自宅にひきこもりながらも、ひきこもりから脱するきっかけを求めている人にとって、時間を問わず利用できる電子メールは、手軽かつ貴重な相談であることを指摘している。しかしこれらの多くは実践報告であり、当事者の望む支援について検討した研究は多いとは言えない現状である。

そこで本研究では、①ケースコントロール研究として、ひきこもり経験者および非経験者を対象としたアンケート調査を実施し、小・中・高校における学校や家庭、地域等での経験について検討を行う。②ひきこもりに関する質的研究として、ひきこもり経験者に対しインタビュー調査を実施し、ひきこもり経験者自身が考える早期に社会参加するための要因につ

いて検討する。これらを基に、主に一次・二次予防に着目し、北海道民が総活躍できる地域社会づくりに向けたひきこもり予防体制のあり方を示すことが本稿の目的である。

## Ⅱ章 方法

### 1. 調査対象・期間・方法

ひきこもり経験者（ケース群：以下、ひきこもり経験群）およびひきこもり非経験者（コントロール群：以下、ひきこもり非経験群）各 30 名ずつの計 60 名を対象に 2018 年 4 月から 12 月に調査を実施した。なお、ひきこもり経験群の選定にあたり札幌、函館、帯広、北見、余市等のひきこもり支援団体等に協力を依頼し、紹介を受けたものを調査の対象とした。ケース群の定義については後述のとおりである。

ひきこもり非経験群については、ケース群と性・年齢（±3 歳）が一致するものとし、機縁法およびスノーボールサンプリングにて対象者を選定した。

調査方法についてケース群、コントロール群の両群を対象に無記名他記式質問紙を用いた構造化面接による聞き取り調査を実施した。その後、ケース群のみを対象とし、半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。なお、インタビューの実施にあたり同意の得られたものについては、IC レコーダーを使用し録音を行った。アンケート調査の所要時間は概ね 15 分程度、インタビュー調査時間は 20～45 分程度とし、調査場所については対象者と相談の上選定した。

### 2. ひきこもりの定義の検討および本研究におけるひきこもり経験者の定義

ひきこもりの定義を初めて提唱したのは斎藤（1998）であり、「20 代後半までに問題化し、6 か月以上自宅に引きこもって社会参加をしない状態が持続しており、そのほかの精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの」としている。この定義は、その後のひきこもり関連調査や公的機関におけるひきこもりの定義のベースとなる重要な定義である。斎藤の定義をベースとした我が国におけるひきこもりに関する代表的な調査として、「こころの健康についての疫学調査に関する研究」（World Mental Health Survey Japan ; 川上ら、2007）において、日本独自の調査として実施されたひきこもりに関する調査があげられる。この調査では「仕事や学校にゆかず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに 6 か月以上続けて自宅にひきこもっている状態。時々買い物などで外出する場合もひきこもりに含めた」と定義している。この定義は厚生労働省の示すガイドライン（厚生労働省、2010）の定義と概ね同様のものである。

東京都（2008）が独自に実施した調査ではひきこもりについて「さまざまな要因によって、社会的な参加の場面がせばまり、就労や就学などの自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている状態」と定義された。

内閣府（2010、2016）はひきこもりについて、「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」状態が 6 か月以上継続しており、統合失調症患者、身体の疾病のあるもの、自宅で仕事をして

いるもの、普段自宅で家事・育児をしているものを除いたものを狭義のひきこもり、「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」ものを準ひきこもり、狭義のひきこもりと準ひきこもりを合算したものを広義のひきこもりと定義して2010年および2016年に国内の15～49歳以下のものを対象とし、ひきこもりに関する調査を実施した。

先行研究（斎藤、1998；川上、2007、2016；東京都、2009；内閣府、2010、2016）を概観すると、「社会参加がない、おおむね家庭に留まり続けている（ただし、他者と交わらない形での外出をしても良い）、その期間が6ヶ月以上続いている」と言う点が共通している。ひきこもりに関連する存在として不登校がある。不登校とは「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」（文部科学省、2018）と定義されるものである。学校での対人関係や家庭環境に起因するものだけでなく、非行などによる群も含まれていることから、ひきこもりとの関係について図1のようになると考える。

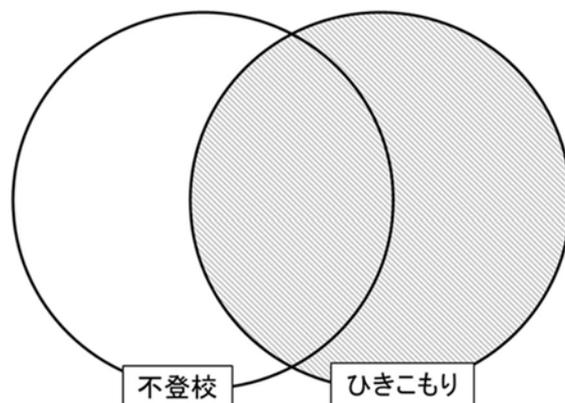


図1 不登校とひきこもりの関連

これらを踏まえ本研究ではひきこもりについて「様々な要因の結果として社会的参加を回避し、原則的には6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を経験したもの。ただし、対人交流を伴わない外出があった場合も含める」と定義する。なお、ひきこもり開始年齢が40歳以上のケース、統合失調症の診断名がついているもの、ひきこもる以前に何らかの精神疾患の診断名が付いているものは本研究の対象者から除外した。

### 3. アンケート調査

#### (1) 調査項目

調査項目は、基本属性6項目、小学校時代の学校での経験14項目、小学校時代の家族との関係・家庭での経験5項目、小学校時代の父親との関係9項目、小学校時代の母親との関係9項目、小学校時代の地域等への参加状況8項目、中学校時代の学校での経験15項目、中学校時代の家族との関係・家庭での経験5項目、中学校時代の父親との関係9項目、中学校時代の母親との関係9項目、中学校時代の地域等への参加状況8項目、高校時代の学校での経験15項目、高校時代の家族との関係・家庭での経験5項目、高校時代の父親との

関係 9 項目、高校時代の母親との関係 9 項目、高校時代の地域等への参加状況 7 項目の計 137 項目とした。調査票については、内閣府（2010、2016）が実施した調査項目を参考に作成した。一部項目について当事者の学歴や通学状況により未回答の項目が含まれる。データセット作成については **Excel for Windows** を使用した。

分類方法に関して、学校での経験のうち「成績について」「教員との関係について」の 2 項目、家庭での経験のうち「暮らし向きについて」「両親の関係について」の 2 項目、父親との関係に関する「父親との関係」の 1 項目、母親との関係に関する「母親との関係」の 1 項目について、「1.よかった」から「5.悪かった」の 5 件法で質問し、「1.よかった」から「3.普通」に該当するものを良好群、それ以外を不良群とした。

学校での経験のうち「クラスでの居場所について」「学校（クラス以外）の居場所について」の 2 項目、家庭での経験のうち「家庭内の居場所について」の 1 項目、父親との関係に関する「父親が過保護であったか」「父親が過干渉であったか」の 2 項目、母親との関係に関する「母親が過保護であったか」「母親が過干渉であったか」の 2 項目、地域での経験における「地域のイベントへの参加経験」の 1 項目について、「1.あった」から「5.なかった」の 5 件法で質問し、「1.あった」から「3.普通」に該当するものを経験あり群、それ以外を経験なし群とした。

## （2）分析方法

ひきこもり経験の有無を目的変数、他の変数を説明変数とし、**Fisher** の直接確率検定およびオッズ比の算出を行った（**SPSS Ver25 for Windows** を使用）。なお、オッズ比と 95% 信頼区間について観測度数に 0 を含むものは算出不可である。

## 4. インタビュー調査

### （1）調査項目

調査項目は①当事者が考えるひきこもりから早期に社会参加に至るための要因、他 5 項目とした。

### （2）分析方法

録音データをもとに逐語録を作成し、各インタビュー項目に適応する箇所を抽出したうえで、意味のあるまとまりを分析単位として **KJ** 法を参考にカテゴリー化を行った。

## 5. 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、対象者に口頭および書面にて①結果の公表に当たり、個人を特定されることはないこと。②調査によって得られたデータは、研究以外の目的で使用しないこと。③調査に参加しないことで不利益を被ることはなく、かつ途中で同意撤回を認めるということを説明し同意の得られたもののみを対象とした。

なお、北海道医療大学大学院看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理委員会の承認を得て行った（承認番号：16N040039）。

### Ⅲ章 ケースコントロール研究の分析結果

#### 1. 基本属性

対象集団の基本属性を以下に示す。両群ともに男性 18 名 (60.0%)、女性 12 名 (40.0%) であった。平均年齢についてひきこもり経験群では  $30.8 \pm 7.4$  歳 (範囲: 18 - 44 歳)、ひきこもり非経験群は  $30.3 \pm 7.1$  歳 (範囲: 18 - 43 歳) であった。過去に何らかの精神疾患等の診断を受けたものはひきこもり経験群では 17 名 (56.7%)、ひきこもり非経験群は 1 名 (3.3%) であった。特に自閉症スペクトラム障害に該当する診断を受けたものに注目するとひきこもり経験群では 9 名 (30.0%)、ひきこもり非経験群では 0 名 (0.0%) であった。

基本属性についてひきこもり経験群と比較しひきこもり非経験群で自閉症スペクトラム障害にあたる障害の該当率が有意に高かった ( $p < 0.01$ 、Fisher の直接確率検定)。

ひきこもり経験群のみに注目すると、初回ひきこもり開始時の学歴は小学校 2 名 (6.7%)、中学校 10 名 (33.3%)、高校中退 4 名 (13.3%)、高校卒業 7 名 (23.3%)、専門学校卒業 1 名 (3.3%)、大学中退 3 名 (10.0%)、大学卒業 2 名 (6.7%)、大学院中退 1 名 (3.3%) であった。ひきこもり平均初回開始年齢は  $15.5 \pm 6.0$  歳 (範囲: 7 - 36 歳) であった (図 2)。通算ひきこもり期間は平均  $7.1 \pm 5.2$  年 (範囲: 0.5 - 19 年) であった (図 3)。また、複数回ひきこもった経験のあるものは 10 名 (33.3%) であった。

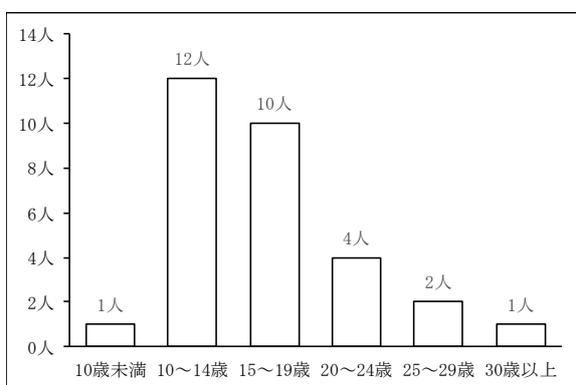


図 2 初回ひきこもり開始年齢

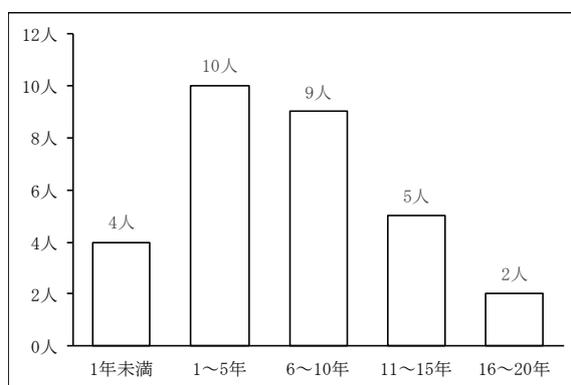


図 3 通算ひきこもり期間

#### 2. 小学校時代の学校での経験

ひきこもり経験と小学校時代の関連について表 1 に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が有意に高かった項目は、「悩みを相談できる人がいなかった」、「困ったときに頼れる人がいなかった」、「授業についていけなかった」、「クラスに居場所がなかった」「学校 (クラス以外) に居場所がなかった」「保健室登校の経験がある」、「不登校の経験がある」の 7 項目であった。

オッズ比をみると「学校 (クラス以外) に居場所がなかった」が最も大きく次いで、「困ったときに頼れる人がいなかった」、「悩み事を相談できる人がいなかった」、「授業についていけなかった」、「クラスに居場所がなかった」となっていた。なお、「保健室登校の経験がある」、「不登校の経験がある」の 2 項目については観測度数に 0 を含むためオッズ比の

算出が不能であった。

表1. ひきこもり経験と学校での経験の関連(小学校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95% C. I.)
	30 (100.0)	30 (100.0)	30 (100.0)	30 (100.0)			
友人がいなかった	3 (10.0)	1 (3.3)	0.61	3.22	0.32 - 32.89	1	(0.32 - 32.89)
話し相手がいなかった	3 (10.3)	1 (3.3)	0.35	3.35	0.33 - 34.20	1	(0.33 - 34.20)
悩みを相談できる人がいなかった	18 (64.3)	5 (16.7)	<0.01	9.00	2.62 - 30.87	5	(2.62 - 30.87)
困ったときに頼れる人がいなかった	19 (67.9)	4 (13.3)	<0.01	13.72	3.67 - 51.27	4	(3.67 - 51.27)
いじめをしたことがある	5 (16.7)	4 (13.3)	1.00	1.30	0.31 - 5.40	4	(0.31 - 5.40)
いじめを受けたことがある	15 (53.6)	15 (50.0)	0.80	1.15	0.41 - 3.24	15	(0.41 - 3.24)
いじめを見て見ぬふりをしたことがない	16 (55.2)	15 (50.0)	0.80	1.23	0.44 - 3.43	15	(0.44 - 3.43)
授業についていけなかった	9 (32.1)	2 (6.9)	0.02	6.39	1.24 - 32.99	2	(1.24 - 32.99)
成績が悪かった	7 (25.0)	2 (6.7)	0.07	4.67	0.88 - 24.80	2	(0.88 - 24.80)
教員との関係が悪かった	5 (16.7)	1 (3.3)	0.20	5.80	0.63 - 53.01	1	(0.63 - 53.01)
クラスに居場所がなかった	8 (26.7)	1 (3.3)	0.03	5.27	1.02 - 27.34	1	(1.02 - 27.34)
学校(クラス以外)に居場所がなかった	10 (37.0)	1 (3.3)	<0.01	17.06	2.00 - 145.15	1	(2.00 - 145.15)
保健室登校の経験がある	6 (20.0)	0 (0.0)	<0.01	-	-	0	-
不登校の経験がある	11 (36.7)	0 (0.0)	<0.01	-	-	0	-

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出よう項目を記述した

### 3. 小学校時代の家族との関係・家庭での経験

小学校時代の家族との関係・家庭での経験について表 2 に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は、「家族との会話の頻度が少なかった」、「家族内に相談相手がいなかった」、「暮らし向きが悪かった」、「両親の関係が悪かった」の4項目であった。

オッズ比をみると「家族との会話の頻度が少なかった」が最も大きく、次いで「家庭内に相談相手がいなかった」、「暮らし向きが悪かった」、「両親の関係が悪かった」となっていた。

表2. ひきこもり経験と家族との関係・家庭での経験の関連(小学校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95% C. I.)
	30 (100.0)	30 (100.0)	30 (100.0)	30 (100.0)			
家族との会話の頻度が少なかった	10 (33.3)	1 (3.3)	<0.01	14.50	1.72 - 122.40	1	(1.72 - 122.40)
家族内に相談相手がいなかった	15 (51.7)	3 (10.0)	<0.01	9.64	2.34 - 39.01	3	(2.34 - 39.01)
家庭内に居場所がなかった	5 (16.7)	2 (6.7)	0.42	2.80	0.50 - 15.73	2	(0.50 - 15.73)
暮らし向きが悪かった	9 (30.0)	2 (6.7)	0.04	6.00	1.17 - 30.73	2	(1.17 - 30.73)
両親の関係が悪かった	9 (37.5)	3 (10.7)	0.04	5.00	1.17 - 21.42	3	(1.17 - 21.42)

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

成績が悪かったと思う

注2: オッズ比が1以上の方向に出よう項目を記述した

### 4. 小学校時代の父親との関係

小学校時代の父親との関係について表 3 に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は、「父親との会話の頻度が少なかった」、「父親の躰が厳しくなかった」、「父親は困ったときの助言してくれなかった」の3項目であった。

オッズ比を見ると「父親は困ったときの助言してくれなかった」が最も大きく、次いで「父親との会話の頻度が少なかった」、「父親の躰が厳しくなかった」の順となっていた。

表3. ひきこもり経験と父親との関係の関連(小学校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95%CI)
	23 (100.0)		29 (100.0)				
父親との関係が悪かった	8 (36.4)		4 (13.8)		0.10	3.57	(0.91 - 14.01)
父親との会話の頻度が少なかった	15 (65.2)		4 (14.3)		<0.01	11.25	(2.88 - 43.95)
父親が過保護でなかった	15 (68.2)		17 (58.6)		0.57	1.51	(0.47 - 4.84)
父親が過干渉でなかった	17 (73.9)		20 (69.0)		0.77	1.28	(0.38 - 4.31)
父親からの躰が厳しくなかった	13 (56.5)		5 (17.2)		<0.01	6.24	(1.76 - 22.18)
父親に将来の進路を決められた	2 (8.7)		2 (7.1)		1.00	1.24	(0.16 - 9.55)
父親は困ったときに助言してくれなかった	15 (75.0)		5 (17.2)		<0.01	14.40	(3.56 - 58.25)
父親は成績を重視していなかった	19 (82.6)		20 (69.0)		0.34	2.14	(0.56 - 8.12)
父親から虐待を受けた	3 (13.0)		1 (3.4)		0.31	4.20	(0.41 - 43.38)

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出るよう項目を記述した

## 5. 小学校時代の母親との関係

小学校時代の母親との関係について表4に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は「母親は困ったときに助言してくれなかった」の1項目であった。

オッズ比をみると「母親は困ったときの助言してくれなかった」の1項目のみオッズ比が有意であり促進的に作用していた。

表4. ひきこもり経験と母親との関係の関連(小学校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95%CI)
	28 (100.0)		30 (100.0)				
母親との関係が悪かった	5 (17.2)		1 (3.4)		0.19	5.83	(0.64 - 53.45)
母親との会話の頻度が少なかった	4 (13.8)		1 (3.4)		0.35	4.48	(0.47 - 42.79)
母親が過保護であった	16 (55.2)		15 (51.7)		1.00	1.15	(0.41 - 3.23)
母親が過干渉でなかった	14 (48.3)		15 (51.7)		1.00	1.15	(0.41 - 3.22)
母親からの躰が厳しくなかった	7 (25.9)		5 (17.2)		0.52	1.68	(0.46 - 6.12)
母親に将来の進路を決められた	4 (14.3)		2 (6.9)		0.42	2.25	(0.38 - 13.40)
母親は困ったときに助言してくれなかった	10 (35.7)		2 (6.9)		0.01	7.50	(1.47 - 38.32)
母親は成績を重視していなかった	19 (70.4)		18 (64.3)		0.78	1.32	(0.43 - 4.09)
母親から虐待を受けた	5 (17.2)		1 (3.4)		0.19	5.83	(0.64 - 53.45)

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出るよう項目を記述した

## 6. 小学校時代の地域等での経験

小学校時代の地域等での経験について表5に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は、「学校・家族以外に悩み事を相談できる人がいなかった」の1項目であった。

表5. ひきこもり経験と地域等での経験の関連(小学校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95%CI)
	30 (100.0)		30 (100.0)				
塾に行っていた	8 (26.7)		8 (26.7)		1.00	1.00	(0.32 - 3.14)
スポーツのクラブチームに入っていた	9 (30.0)		8 (26.7)		1.00	1.18	(0.38 - 3.63)
少年団に入っていなかった	23 (76.7)		15 (50.0)		0.06	3.29	(1.08 - 9.95)
その他の習い事をしていなかった	16 (53.3)		8 (26.7)		0.06	3.14	(1.07 - 9.27)
地域のイベントに参加していない	10 (34.5)		10 (33.3)		1.00	1.05	(0.36 - 3.09)
学外の友人がいなかった	18 (60.0)		11 (36.7)		0.12	2.59	(0.91 - 7.34)
学校・家庭以外の居場所がなかった	18 (60.0)		10 (33.3)		0.07	3.00	(1.05 - 8.60)
学校・家族以外に悩み事を相談できる人がいなかった	29 (96.7)		20 (66.7)		<0.01	14.50	(1.72 - 122.40)

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出るよう項目を記述した

オッズ比に着目すると、「学校・家族以外に悩み事を相談できる人がいなかった」が最も大きく、次いで「少年団に入っていなかった」、「その他の習い事をしていなかった」となっていた。

## 7. 中学校時代の学校での経験

中学校時代の学校での経験について表 6 に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は、「友人がなかった」、「話し相手がなかった」、「悩みを相談できる人がいなかった」、「困ったときに頼れる人がいなかった」、「授業についていけなかった」、「成績が悪かった」、「クラスに居場所がなかった」、「学校（クラス以外）に居場所がなかった」、「保健室登校の経験がある」、「不登校の経験がある」の 10 項目であった。

オッズ比が最も大きかったのは「悩みを相談できる人がいなかった」であり、その後「困ったときに頼れる人がいなかった」、「成績が悪かった」、「授業についていけなかった」となっていた。なお、「友人がいた」、「話し相手がいた」、「クラスに居場所があった」、「学校に居場所があった」、「保健室登校の経験がある」、「不登校の経験がある」の 6 項目については観測度数に 0 を含むためオッズ比の算出が不可であった。

表6. ひきこもり経験と学校での経験の関連(中学校時代)

	ひきこもり経験と学校での経験の関連(中学校時代)		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95% C. I.)
	ひきこもり経験群	ひきこもり非経験群			
友人がなかった	28 (100.0)	30 (100.0)	<0.01	-	-
話し相手がなかった	4 (14.3)	0 (0.0)	<0.01	-	-
悩みを相談できる人がいなかった	19 (70.4)	1 (3.3)	<0.01	68.88	(7.960 - 595.96)
困ったときに頼れる人がいなかった	20 (74.1)	2 (6.9)	<0.01	38.57	(7.228 - 205.82)
いじめをしたことがない	25 (89.3)	25 (83.3)	0.51	1.67	(0.36 - 7.74)
いじめを受けたことがある	11 (39.3)	8 (26.7)	0.31	1.78	(0.59 - 5.39)
いじめを見て見ぬふりをしたことがない	16 (59.3)	16 (53.3)	0.65	1.27	(0.45 - 3.64)
授業についていけなかった	14 (51.9)	6 (21.4)	0.03	3.95	(1.22 - 12.81)
成績が悪かった	15 (57.7)	7 (23.3)	0.01	4.48	(1.42 - 14.14)
教員との関係が悪かった	6 (23.1)	5 (17.2)	0.74	1.44	(0.38 - 5.43)
クラスに居場所がなかった	15 (55.6)	0 (0.0)	<0.01	-	-
学校(クラス以外)に居場所がなかった	15 (53.6)	0 (0.0)	<0.01	-	-
保健室登校の経験がある	9 (31.0)	0 (0.0)	<0.01	-	-
不登校の経験がある	14 (50.0)	0 (0.0)	<0.01	-	-
高校受験に失敗した	21 (84.0)	25 (83.3)	1.00	1.05	(0.25 - 4.42)

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

-: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出るよう項目を記述した

## 8. 中学校時代の家族との関係・家庭での経験

中学校時代の家族との関係・家庭での経験について表 7 に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は、「家族との会話の頻度が少なかった」、「家族内に相談相手がなかった」、「家庭内に居場所がなかった」、「暮らし向きが悪かった」、「両親の関係が悪かった」の 5 項目であった。

オッズ比については「家庭内に居場所がなかった」が最も大きく、その後「家族内に相談相手がなかった」、「家族との会話の頻度が少なかった」、「暮らし向きが悪かった」、「両親の関係が悪かった」の順となっていた。

表7. ひきこもり経験と家族との関係・家庭での経験の関連(中学校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95% C. I.)
	30 (100.0)		30 (100.0)				
家族との会話の頻度が少なかった	17 (56.7)		5 (16.7)		<0.01	6.54	(1.97 - 21.74)
家族内に相談相手がいなかった	20 (66.7)		9 (30.0)		<0.01	6.67	(2.30 - 19.31)
家庭内に居場所がなかった	10 (33.3)		2 (6.7)		0.02	7.00	(1.38 - 35.48)
暮らし向きが悪かった	9 (30.0)		2 (6.7)		0.04	6.00	(1.17 - 30.73)
両親の関係が悪かった	9 (42.9)		4 (14.3)		0.04	4.50	(1.15 - 17.65)

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

成績が悪かったと思う

注2: オッズ比が1以上の方向に出よう項目を記述した

## 9. 中学校時代の父親との関係

中学校時代の父親との関係について表8に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は「父親との関係が悪かった」、「父親との会話の頻度が少なかった」、「父親は困ったときに助言してくれなかった」の3項目であった。

オッズ比を見ると「父親は困ったときに助言してくれなかった」が最も大きく、次いで「父親との会話の頻度が少なかった」、「父親との関係が悪かった」となっていた。

表8. ひきこもり経験と父親との関係の関連(中学校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95% C. I.)
	23 (100.0)		29 (100.0)				
父親との関係が悪かった	10 (43.5)		3 (10.3)		<0.01	6.67	(1.56 - 28.47)
父親との会話の頻度が少なかった	16 (69.6)		7 (24.1)		<0.01	7.18	(2.10 - 24.57)
父親が過保護でなかった	17 (73.9)		19 (65.5)		0.56	1.49	(0.45 - 4.98)
父親が過干渉でなかった	16 (69.6)		20 (69.0)		1.00	1.03	(0.31 - 3.37)
父親からの躰が厳しくなかった	9 (45.0)		10 (34.5)		0.56	1.55	(0.48 - 4.99)
父親に将来の進路を決められなかった	21 (91.3)		26 (89.7)		1.00	1.21	(0.18 - 7.93)
父親は困ったときに助言してくれなかった	16 (72.7)		6 (20.7)		<0.01	10.22	(2.79 - 37.47)
父親は成績を重視していなかった	18 (81.8)		18 (62.1)		0.21	2.75	(0.74 - 10.27)
父親から虐待を受けた	5 (21.7)		1 (3.4)		0.08	7.78	(0.84 - 72.13)

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出よう項目を記述した

## 10. 中学校時代の母親との関係

中学校時代の母親との関係について表9に示した。ひきこもり非経験群と捕獲しひきこもり経験群で有意に該当率が高かった項目は、「母親との会話の頻度が少なかった」、「母親は困ったときに助言してくれなかった」の2項目であった。

オッズ比を見ると「母親は困ったときに助言してくれなかった」が最も大きく、次に「母親との会話の頻度が少なかった」となっていた。

表9. ひきこもり経験と母親との関係の関連(中学校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95% C. I.)
	28 (100.0)		29 (100.0)				
母親との関係が悪かった	8 (29.6)		5 (17.2)		0.35	2.02	(0.57 - 7.19)
母親との会話の頻度が少なかった	13 (48.1)		3 (10.3)		<0.01	8.05	(1.96 - 33.08)
母親が過保護でなかった	14 (50.0)		15 (51.7)		1.00	1.07	(0.38 - 3.03)
母親が過干渉でなかった	16 (57.1)		14 (48.3)		0.60	1.43	(0.50 - 4.06)
母親からの躰が厳しくなかった	10 (38.5)		5 (17.2)		0.13	3.00	(0.86 - 10.43)
母親に将来の進路を決められた	5 (18.5)		3 (10.3)		0.46	1.97	(0.42 - 9.19)
母親は困ったときに助言してくれなかった	16 (59.3)		4 (13.8)		<0.01	9.09	(2.46 - 33.53)
母親は成績を重視していなかった	19 (70.4)		18 (62.1)		0.58	1.45	(0.48 - 4.43)
母親から虐待を受けた	2 (7.1)		1 (3.4)		0.61	2.15	(0.18 - 25.19)

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出よう項目を記述した

## 1 1. 中学校時代の地域等での経験

中学生時代の地域等での経験について表 10 に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は「学校・家庭以外の居場所がなかった」、「学校・家族以外に悩み事を相談できる人がいなかった」の 2 項目であった。

オッズ比が最も大きかったのは「学校・家族以外に悩み事を相談できる人がいなかった」であり、次いで「学校・家庭以外の居場所がなかった」、「学外の友人がなかった」となっていた。

表10. ひきこもり経験と地域での経験の関連(中学校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95% C. I.)
	30 (100.0)	19 (63.3)	30 (100.0)	12 (40.0)			
塾に行っていなかった	19 (63.3)	12 (40.0)	0.12	2.59	(0.91 - 7.34)		
スポーツのクラブチームに入っていなかった	25 (83.3)	26 (86.7)	1.00	1.30	(0.31 - 5.40)		
少年団に入っていなかった	30 (100.0)	25 (83.3)	0.52	-	-		
その他の習い事をしていなかった	24 (80.0)	19 (63.3)	0.25	2.32	(0.72 - 7.41)		
地域のイベントに参加していない	23 (79.3)	17 (56.7)	0.09	2.93	(0.93 - 9.28)		
学外の友人がなかった	20 (66.7)	12 (40.0)	0.07	3.00	(1.05 - 8.60)		
学校・家庭以外の居場所がなかった	26 (89.7)	10 (33.3)	<0.01	17.33	(4.21 - 71.41)		
学校・家族以外に悩み事を相談できる人がいなかった	29 (96.7)	13 (43.3)	<0.01	37.92	(4.55 - 316.03)		

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出よう項目を記述した

## 1 2. 高校時代の学校での経験

高校時代の学校での経験について表 11 に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は「友人がなかった」、「話し相手がなかった」、「悩み事を相談できる人がいなかった」、「困ったときに頼れる人がいなかった」、「学校(クラス以外)に居場所がなかった」、「不登校の経験がある」の 6 項目であった。

オッズ比をについて「困ったときに頼れる人がいなかった」が最も大きく、次いで「悩み事を相談できる人がいなかった」、「学校(クラス以外)に居場所がなかった」となっていた。なお、「友人がなかった」「話し相手がなかった」「不登校の経験がなかった」の 3 項目については観測度数に 0 を含むためオッズ比の算出が不能であった。

表11. ひきこもり経験と学校での経験の関連(高校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95% C. I.)
	21 (100.0)	5 (23.8)	30 (100.0)	0 (0.0)			
友人がなかった	5 (23.8)	0 (0.0)	<0.01	-	-		
話し相手がなかった	5 (23.8)	0 (0.0)	<0.01	-	-		
悩みを相談できる人がいなかった	16 (76.2)	4 (13.8)	<0.01	20.00	(4.66 - 85.85)		
困ったときに頼れる人がいなかった	16 (76.2)	3 (10.3)	<0.01	27.73	(5.82 - 132.11)		
いじめをしたことがない	19 (95.0)	28 (93.3)	1.00	1.36	(0.11 - 16.05)		
いじめを受けたことがある	8 (42.1)	5 (16.7)	0.10	3.64	(0.97 - 13.66)		
いじめを見て見ぬふりをしたことがある	6 (30.0)	6 (20.0)	0.51	1.71	(0.46 - 6.35)		
授業についていけた	12 (60.0)	21 (75.0)	0.35	2.00	(0.58 - 6.90)		
成績が悪かった	8 (40.0)	6 (20.0)	0.20	2.67	(0.75 - 9.45)		
教員との関係がよかった	18 (90.0)	26 (86.7)	1.00	1.38	(0.23 - 8.38)		
クラスに居場所がなかった	6 (30.0)	5 (16.7)	0.31	2.14	(0.55 - 8.31)		
学校(クラス以外)に居場所がなかった	6 (31.6)	1 (3.3)	0.01	13.3846	(1.46 - 122.72)		
保健室登校の経験がある	2 (10.0)	1 (3.3)	0.56	3.22	(0.27 - 38.15)		
不登校の経験がある	4 (20.0)	0 (0.0)	0.02	-	-		
大学受験に失敗した	9 (81.8)	24 (80.0)	1.00	1.13	(0.19 - 6.63)		

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出よう項目を記述した

### 1 3. 高校時代の家族との関係・家庭での経験

高校時代の家族との関係・家庭での経験について表 12 に示した。すべての項目でひきこもり非経験群とひきこもり経験群の該当率に有意な差は見られなかった。オッズ比についてすべての項目で有意ではなかった。

表12. ひきこもり経験と家族との関係・家庭での経験の関連(高校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n (%) (95% C. I.)
	20 (100.0)	30 (100.0)	20 (100.0)	30 (100.0)			
家族との会話の頻度が多かった	8 (40.0)	8 (26.7)	8 (40.0)	8 (26.7)	0.37	1.83	(0.55 - 6.13)
家族内に相談相手があった	10 (50.0)	10 (26.7)	10 (50.0)	10 (26.7)	0.13	2.75	(0.83 - 9.07)
家庭内に居場所があった	4 (20.0)	4 (10.0)	4 (20.0)	4 (10.0)	0.42	2.25	(0.45 - 11.37)
暮らし向きが良かった	5 (25.0)	5 (10.0)	5 (25.0)	5 (10.0)	0.24	3.00	(0.63 - 14.34)
両親の関係が良かった	4 (33.3)	4 (14.3)	4 (33.3)	4 (14.3)	0.21	3.00	(0.61 - 14.86)

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出よう項目を記述した

### 1 4. 高校時代の父親との関係

高校時代の父親との関係について表 13 に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は「父親は困ったときに助言してくれなかった」の1項目であった。

オッズ比を見ると、「父親は困ったときに助言してくれなかった」の1項目で有意であり促進的に作用していた。

表13. ひきこもり経験と父親との関係の関連(高校時代)

	ひきこもり経験群		ひきこもり非経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n (%) (95% C. I.)
	14 (100.0)	29 (100.0)	14 (100.0)	29 (100.0)			
父親との関係が悪かった	4 (30.8)	4 (14.3)	4 (30.8)	4 (14.3)	0.24	2.67	(0.55 - 12.99)
父親との会話の頻度が少なかった	10 (71.4)	12 (41.4)	10 (71.4)	12 (41.4)	0.10	3.54	(0.90 - 14.01)
父親が過保護でなかった	12 (85.7)	20 (71.4)	12 (85.7)	20 (71.4)	0.45	2.40	(0.44 - 13.23)
父親が過干渉でなかった	10 (71.4)	19 (67.9)	10 (71.4)	19 (67.9)	1.00	1.18	(0.29 - 4.83)
父親からの躰が厳しくなかった	7 (58.3)	8 (28.6)	7 (58.3)	8 (28.6)	0.09	3.50	(0.85 - 14.34)
父親に将来の進路を決められていない	13 (92.9)	25 (86.2)	13 (92.9)	25 (86.2)	1.00	2.08	(0.21 - 20.57)
父親は困ったときに助言してくれなかった	9 (69.2)	4 (13.8)	9 (69.2)	4 (13.8)	<0.01	14.06	(2.89 - 68.38)
父親は成績を重視していない	11 (78.6)	17 (58.6)	11 (78.6)	17 (58.6)	0.31	2.59	(0.59 - 11.31)
父親から虐待を受けた	2 (14.3)	2 (6.9)	2 (14.3)	2 (6.9)	0.59	2.25	(0.28 - 17.91)

p: Fisherの直接確率検定

OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした

—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目

注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる

注2: オッズ比が1以上の方向に出よう項目を記述した

### 1 5. 高校時代の母親との関係

高校時代の母親との関係について表 14 に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が高かった項目は「母親との関係が悪かった」、「母親は困ったときに助言してくれなかった」の2項目であった。

オッズ比が最も大きかったのは「母親は困ったときに助言してくれなかった」であり、次いで「母親との関係が悪かった」となっていた。

表14. ひきこもり経験と母親との関係の関連(高校時代)

	ひきこもり経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95% C.I.)
	ひきこもり経験群	ひきこもり非経験群			
母親との関係が悪かった	6 (33.3)	2 (7.1)	0.04	6.50	(1.14 - 37.05)
母親との会話の頻度が少なかった	8 (44.4)	5 (17.9)	0.09	3.68	(0.96 - 14.08)
母親が過保護でなかった	11 (61.1)	12 (42.9)	0.37	2.10	(0.63 - 7.01)
母親が過干渉でなかった	9 (50.0)	12 (42.9)	0.76	1.33	(0.41 - 4.38)
母親からの躰が厳しくなかった	4 (25.0)	6 (21.4)	1.00	1.22	(0.29 - 5.20)
母親に将来の進路を決められた	2 (11.8)	2 (6.9)	0.62	1.80	(0.23 - 14.11)
母親は困ったときに助言してくれなかった	12 (70.6)	4 (13.8)	<0.01	15.00	(3.40 - 66.16)
母親は成績を重視していない	12 (66.7)	17 (58.6)	0.76	1.41	(0.41 - 4.82)
母親から虐待を受けた	2 (11.1)	1 (3.4)	0.76	3.50	(0.29 - 41.70)

p: Fisherの直接確率検定  
OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした  
—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目  
注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる  
注2: オッズ比が1以上の方向に出るよう項目を記述した

## 16. 高校校時代の地域等での経験

高校時代の地域等での経験について表15に示した。ひきこもり非経験群と比較しひきこもり経験群で該当率が低かった項目は「学外の友人がいなかった」、「学校・家庭以外の居場所がなかった」、「学校・家族以外に悩み事を相談できる人がいなかった」の3項目であった。

オッズ比を見ると「学外の友人がいなかった」が最も大きく、次いで「学校・家族以外に悩み事を相談できる人がいなかった」、「学校・家庭以外の居場所がなかった」となっていた。

表15. ひきこもり経験と地域での経験の関連(高校時代)

	ひきこもり経験群		p	OR (下限値 - 上限値)	n(%) (95% C.I.)
	ひきこもり経験群	ひきこもり非経験群			
塾に行っていない	18 (90.0)	24 (80.0)	1.00	1.13	(0.24 - 5.38)
スポーツのクラブチームに入っていない	17 (85.0)	25 (83.3)	0.27	-	-
その他の習い事をしていない	20 (100.0)	27 (90.0)	0.45	2.25	(0.41 - 12.48)
地域のイベントに参加していない	16 (80.0)	23 (76.7)	1.00	1.22	(0.30 - 4.86)
学外の友人がいなかった	15 (75.0)	5 (16.7)	<0.01	15.00	(3.72 - 60.53)
学校・家庭以外の居場所がなかった	12 (60.0)	8 (26.7)	0.04	4.13	(1.23 - 13.78)
学校・家族以外に悩み事を相談できる人がいなかった	16 (80.0)	9 (30.0)	<0.01	9.33	(2.43 - 35.84)

p: Fisherの直接確率検定  
OR: オッズ比, ひきこもり非経験群を0, ひきこもり経験群を1とした  
—: 観測度数に0を含むため算出不能の項目  
注1: 一部項目について欠損値があるため母数が異なる  
注2: オッズ比が1以上の方向に出るよう項目を記述した

## 17. 考察

本研究の結果、ひきこもり経験群は自閉症スペクトラム障害にあたる障害の該当率が高かった。これは近藤(2004)の研究を支持する結果であった。小川他(2018)の不登校経験のある発達障害を抱える児童を対象とした研究によると、その支援について居場所支援と放課後等デイサービスを組み合わせることにより、心理的な居場所の確保のみならず、特性に応じた空間づくりが有効である可能性を指摘している。また、総合的な支援ニーズを一事業所内で受け入れることで信頼関係の構築された支援者による総合的な支援が可能となり、これが発達障害を抱える不登校児のひきこもり予防につながる可能性を指摘している。これらのことから、自閉症スペクトラム障害等を早期に発見し、適切な支援に繋げることがひきこもり予防の重要な要因の一つであると考えられる。

ひきこもり経験群の特徴について、小学校時代の学校場面においてはクラスや学校に居場所がなく、困ったときに頼れる人や悩み事を相談できる人がおらず、授業についていけ

なかったと感じていた。また、保健室登校や不登校の経験があった。家庭においては家族との会話の頻度が少なく、家庭内に悩み事を相談できる人がおらず、暮らし向きが悪く、両親の関係も悪いと感じていた。また、父親は困ったとき助言してくれず、会話の頻度が少なく、躰は厳しくなかったと感じていた。さらに、母親は困ったときに助言してくれなかったと感じていた。地域等に目を向けると、学校や家族以外に悩み事を相談できる人がいなかった。

中学校時代では、学校に悩み事を相談できる人、困ったときに頼れる人がいなく、友人や話し相手もおらず、クラスを含む学校内に居場所がなく、授業についていけず成績が悪かったと感じていた。また不登校、保健室登校の経験を有していた。家庭では、家庭内に居場所がなく、家族内に相談相手がおらず、家族との会話の頻度が少なかったと感じていた。さらに、暮らし向きが悪かった、両親の関係が悪かったとも感じていた。親子関係について、父親は困ったとき助言してくれず、会話の頻度が少なく、関係が悪かったと感じており、母親は困ったときに助言してくれなかったと感じていた。地域では学校や家庭以外の居場所がなく、学校や家族以外の悩み事を相談できる人がいなかった。

高校時代については、学校に友人や話し相手、悩み事を相談できる人、困ったとき頼れる人がいなく、学校に居場所がないと感じていた。また不登校の経験を有していた。父母との関係については、父母共に困ったとき助言をしてくれないと感じていた。また、母親との関係が悪いと感じていた。地域においては、学校・家族以外に悩み事を相談できる人がいなく、学校・家庭以外の居場所がなく、学外の友人がなかった。

これらの結果を包括的にみると、小中高等学校全てで一貫して、学校内に悩みを相談できる人や、困ったときに頼れる人がおらず、学校内に居場所がなく、不登校の経験があった。これは先行研究（斎藤、1998；内閣府、2010；村澤、2013）とおおむね同様の結果であった。一方で、いじめについては一貫して関連が見られなかった。これについて、いじめの経験率は小学校 4.91%、中学校 2.40%、高校 0.43%（文部科学省、2018 より算出）であり、ひきこもり非経験群のいじめ経験率が小中高全ての段階で高かったことが影響していると考えられる。また、家庭では父母が困ったときに助言をしてくれなかったと感じていた。増田他（2004）は家族機能が不良の家庭で育った子供について、友達を作れず、いじめを受けやすいことから学校が面白くなり、しばしば休みようになる危険性があると述べている。また、五十嵐他（2004）は、男子中学生について幼少期の父母との愛着に不信・拒否優位の型を有していると在宅での不登校を希望する傾向にあることを指摘しておりこれを一部支持する結果であった。地域では学校・家族以外に悩みを相談できる人がいなかった。ひきこもり経験者の過去の地域での経験についてこれまで十分に検討されていないことから非常に興味深い結果であり、今後詳細に検討する必要があると考える。

## IV章 インタビューデータの分析

### 1. 当事者が考えるひきこもりから早期に社会参加に至るための支援

当事者が考えるひきこもりから早期に社会参加に至るための要因について表 16 に示した。語りを分類した結果、【支援の情報】、【サポートティブな対人関係】、【なし】がカテゴリーと

して得られた。

【支援の情報】については『支援情報の取得』がサブカテゴリとして得られ、特徴的な語りとしては「知ってるか知らないかじゃないですか、(中略)受け皿的な施設とか機関があるってことをどれだけ広めていくかというか。知っていれば足も出向くだろうし、知らなかったら本当に家にこもるしかないんで。」「子どもの頃なんで。多分大人の引きこもりの方とは多分ちょっと状況が違うというか、求めるものが違うと思うんですけど。当時情報が少なかった、入ってくる情報が。今は結構みんなインターネットで探すすべを身につけてきて、簡単に何かそういう支援の窓口とか情報を見つけられると思うんですけど、当時はあまりインターネットを検索しても引っかかるものは少なくて。だから何か情報が入ってくる仕組みがるといいな。」などがあつた。

【サポートティブな対人関係】については『身近なものとの関係』と『第三者との関係』がサブカテゴリとして得られ、特徴的な語りとしては「ひきこもっているときに、たまに高校のときに何か仲良かった友達とかが遊ぼうよって言って誘ってくれたことがあつたんで、なんですかね、友達というか、そういう人とかがいたらもうちょっと変わったかもしれないですかね。」「やっぱり励ましてくれる人とか、叱咤激励してくれ人はやっぱりちょっと足りないんで、いたほうがいいんじゃないかなと思うんですよ」、「(友人・教員には話しにくい)カウンセラーとか、ただ話を聞いてくれる人がいると違うと思います」などがあつた。

【なし】については『特になし』と『不明』がサブカテゴリとして得られ、特徴的な語りとしては「実は無いんですよ。(中略)、結局は親にも相談するとか困ったといわないとか、僕は自分で解決しようとずっと思ってたし、何があつても A 支援機関にはいかなかったと思うので。」「わからない」などがあつた。

表16. 当事者が考えるひきこもりから早期に社会参加に至るための支援サブカテゴリの例

カテゴリ	サブカテゴリ	語りの例
支援の情報	支援情報の取得	知ってるか知らないかじゃないですか、(中略)受け皿的な施設とか機関があるってことをどれだけ広めていくかというか。知っていれば足も出向くだろうし、知らなかったら本当に家にこもるしかないんで。
サポートティブな対人関係	身近なものとの関係	ひきこもっているときに、たまに高校のときに何か仲良かった友達とかが遊ぼうよって言って誘ってくれたことがあつたんで、なんですかね、友達というか、そういう人とかがいたらもうちょっと変わったかもしれないですかね。
	第三者との関係	(友人・教員等には話しにくい)カウンセラーとか、ただ話を聞いてくれる人がいると違うと思います。 やっぱり励ましてくれる人とか、叱咤激励してくれ人はやっぱりちょっと足りないんで、いたほうがいいんじゃないかなと思うんですよ
なし	とくになし	実は無いんですよ。(中略)、結局は親にも相談するとか困ったといわないとか、僕は自分で解決しようとずっと思ってたし、何があつても A 支援機関にはいかなかったと思うので
	不明	わからない

## 2. 考察

インタビューデータの分析の結果、当事者が考えるひきこもりから早期に社会参加に至るための要因について、【支援の情報】、【サポートティブな対人関係】、【なし】という結果であつた。

【支援の情報】については、情報の有無により支援につながる可能性が大きく異なること、情報の取得に困難さがあることが示唆されたと考える。ひきこもり支援について厚生

労働省による若者サポートステーション事業やひきこもり地域支援センター事業のほか、NPO 法人が実施する支援活動などが数多く存在する。しかし、当事者にこれらの情報が十分に届いていない可能性が示された。2018 年より厚生労働省がひきこもり対策推進事業における、ひきこもり支援に携わる人材の養成研修・ひきこもりサポート事業の一環として、市町村において、支援機関等の情報発信を実施している。また、2018 年 5 月に発足した NPO 法人 Node が、ひきこもりに関する総合情報ポータルサイト「ひきペディア」を開設し、支援情報の提供を行っている。これらにより従来よりも支援情報の取得が容易になったと考える。しかし、その効果について十分に検証されていないこと、また、ローカルな支援情報については十分に網羅されていないことが想定されることから、今後これらの有効性について検討するとともに、ひきこもり経験者の支援情報取得の方法について調査を行う必要があると考える。

【サポーティブな対人関係】について、『身近なものとの関係』および『第三者との関係』が重要である可能性が示唆された。一方で【なし】と答えた群も存在していた。これについて、『特にない』場合と『不明』である場合がある可能性が示された。『特にない』に着目すると、「実は無いんですよ。(中略)、結局は親にも相談するとか困ったといわないとか、僕は自分で解決しようと思っただけ、何があっても A 支援機関にはいかなかったと思うので。」などがあつた。内閣府(2010)の調査によると、ひきこもり状態をどの様な支援機関に相談したいかについて自分の話を親身に聞いてくれる機関を求めているものが少なからず存在する一方で、相談したくないと回答したものも一定程度いることを示しており、これを一部支持する結果であつたと考える。また、友人との関係についてこれまであまり触れられておらず興味深い知見であり、今後詳細に検討する必要があると考える。

## V 章 結語

本研究は、北海道民が総活躍できる地域社会づくりに向けたひきこもりの一次および二次予防体制確立のあり方を検討することを目的として、ひきこもり経験者と非経験者を対象としたケースコントロール研究を実施し、あわせてひきこもり経験者を対象としたインタビュー調査を行った。その結果、ひきこもりの一次予防に向けて、自閉症スペクトラム障害の早期発見と早期対応、小中高等学校各段階において、学校・家庭・地域の各場面に悩み事や困りごとがあつた際に頼れる存在を持つとともに、居場所と思えるような場を作ることが重要であることが示された。二次予防の観点からはひきこもり支援にかかわる情報について当事者が網羅的かつ適切に取得できるような仕組みの構築が必要であること、サポーティブな対人関係の存在があること、カウンセラーやソーシャルワーカーなど家族や友人以外の悩み事を相談できる存在の拡充の必要性が示唆された。これは、北海道民が総活躍できる地域社会づくりに向けたひきこもり予防策の根幹となる要因であるとともに、地域住民が困難を抱えた際に活用することのできるセーフティネットの構築につながるものであり、すべての北海道民が心身の健康を保ちながら活躍できる地域社会づくりに向けた鍵となると言えよう。このセーフティネットについて、地域福祉の視座に立ち、学校・

家庭・地域・行政が相互に連携を図りながら構築し提供することにより、フォーマルな資源とインフォーマルな資源の双方を活用した有効な支援を行うことが可能となる。

本研究の有効性は、ひきこもりを対象とした本邦で初のケースコントロール研究であり、エビデンスレベルの高いひきこもり一次予防への示唆を得ることができた点、小中高等学校各段階に共通する課題および各段階特有の問題について詳細に検討した点、これまであまり目を向けられてこなかった当事者の望む支援について検討したことにより、ひきこもり当事者の負担の少ない形で社会復帰するための二次予防に向けた示唆を得た点である。

本研究の限界は、ケースコントロール研究であるため想起バイアス生じる可能性があること、対象者数が少ないこと、調査地域が限られていることである。今後、対象者数を増しさらに性別や発達障害の有無などによる予防策を明らかにするとともに、ひきこもり経験者が実際に社会復帰するまでのプロセスを分析すること、本研究により得られた知見について地域住民が知り、有効に活用できるための簡易チェックリストの作成をはじめとする啓発方法について検討を行うことが課題である。

また、ひきこもりについて「様々な要因の結果として社会的参加を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を経験したもの。ただし、対人交流を伴わない外出があった場合も含める」と規定し研究を実施したが、スマートフォンの普及やSNSの広がりにより対人関係の在り方も多様化してきている。このことから、ひきこもり経験者の対人関係について直接的交流だけではなくオンライン上での人間関係も加味した詳細な調査を行う必要がある。

## VI章 謝辞

本研究を実施するに当たりご協力いただいた、さっぽろ若者サポートステーション、公益財団法人北海道精神保健推進協会北海道ひきこもり成年相談センター・札幌市ひきこもり地域支援センター、樹陽のたより、オホーツク若者サポートステーション、おびひろ地域若者サポートステーション、曹洞宗龍雲山禅林寺、その他の協力いただいた機関職員の皆様、調査にご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。データ分析にあたり協力いただいた北海道医療大学看護福祉学部生の出口鈴香さん、澤岡茉莉乃さんに感謝いたします。本研究を行うに当たり研究助成を頂いた一般財団法人北海道開発協会の皆様に深謝いたします。

## 【参考文献】

### 1. 書籍

- American Psychiatric Association(高橋三郎、大野裕、染矢俊幸、神庭重信、尾崎紀夫、三村將、村井俊哉 訳)(2014)『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院
- 池上正樹(2016)『ひきこもる女性たち』ベストセラーズ
- 石田基広、金明哲(2012)『コーパスとテキストマイニング』共立出版
- 井出草平(2007)『ひきこもりの社会学』世界思想社
- 伊藤隆二、橋口英俊、春日喬(1994)『人間の発達と臨床心理学 4 思春期・青年期の臨床心理学』駿河台出版社
- Erik H. Erikson(西平直、中島由恵 訳)(2011)『アイデンティティとライフサイクル』誠真書房
- Erik H. Erikson(中島由恵 訳)(2017)『アイデンティティ・青年と危機』新曜社
- Kenneth J. Rothman(矢野栄二、橋本英樹、大脇和浩)(2013)『ロスマンの疫学科学的思考への誘い第2版』篠原出版新社
- 古賀正義、石川 良子(2018)『ひきこもりと家族の社会学』世界思想社
- 斎藤環(1998)『社会的ひきこもり—終わらない思春期』PHP 研究所
- 桜井厚、小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房
- John Bowlby(黒田実郎、大羽葵、岡田洋子、黒田聖一 訳)(1991)『母子関係の理論 I 愛着行動』岩崎出版
- John Bowlby(黒田実郎、横浜恵三子、吉田恒子 訳)(1991)『母子関係の理論 II 対象喪失』岩崎出版
- 関水徹平(2016)『「ひきこもり」経験の社会学』左右社
- 中村好一(2012)『基礎から学ぶ楽しい疫学第3版』医学書院
- ハイメカスタニエダ、長島正(1989)『ライフサイクルと人間の意識』金子書房
- 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分類』ナカニシヤ出版
- 山縣文治(2010)『リーディングス日本の社会福祉 8 子ども家庭福祉』日本図書センター
- リサ・F・パークマン、イチロー・カワチ、M・マリア・グリモール(高尾総司、藤原武男、近藤尚己 訳)(2017)『社会疫学上』大修館書店
- リサ・F・パークマン、イチロー・カワチ、M・マリア・グリモール(高尾総司、藤原武男、近藤尚己 訳)(2017)『社会疫学下』大修館書店

### 2. 論文

- 小川豊昭(2012). 「ひきこもりの精神分析—幼少期のコンテイング機不全から生じる誇大なナルシズムと情動的攻撃性—」『精神神経学雑誌』 114(10), 1149-1157
- 川上憲人、竹島正、大野裕、深尾彰、堀口逸子、立森久照(2007)『こころの健康についての疫学調査に関する研究総合研究報告書』
- 厚生労働省(2010)『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』 <<http://www.zmhwc.jp/pdf/report/guidebook.pdf>> [2011, April 1]
- 小松崎明、江面晃、黒川裕臣、田中彰、藤井一維、小野幸絵、鈴木見奈子、吉岡裕雄、岡田匠、野村隆(2013)「社会的ひきこもり者の歯科保健医療に関する検討：ひきこもり者に対する質問紙調査の結果から」『口腔衛生学雑誌』 63(1)、23-27
- 小山明日香、三宅由子、立森久照、竹島正、川上憲人(2007)「地域疫学調査による「ひきこもり」の実態

- と精神医学的診断について－平成 14 年度～平成 17 年度のまとめ－ <[http://www.ncnp.go.jp/nimh/keikaku/epi/Reports/H16\\_18WMHJR/H16\\_18WMHJR05.pdf](http://www.ncnp.go.jp/nimh/keikaku/epi/Reports/H16_18WMHJR/H16_18WMHJR05.pdf)> [2014 年 April 1]
- 近藤直司, 小林真理子, 有泉加奈絵, 中嶋真人, 河西文子, 松木安子, 薬師神彩(2004)「思春期・青年期における不登校・ひきこもりと発達障害」『精神保健研究』17, 17-24
- 高畑隆(2003)「埼玉県における「ひきこもり」の実態」『精神医学』45(3), 299-302
- 竹中哲夫(2009)「ライフステージに対応したひきこもり支援」『日本福祉大学社会福祉論集』(120), 1-30
- 立脇洋介, 田村毅(2011)「電子メール相談によるひきこもり支援」『東京学芸大学紀要』総合教育科学系, 62(2), 263-267
- 東京都(2008)「実態調査から見る若者のこころ」 <[http://www.seisyounen-chian.metro.tokyo.jp/seisyounen/pdf/seisyounen/pdf/14\\_jyakunen/jittaihoukokusyo.pdf](http://www.seisyounen-chian.metro.tokyo.jp/seisyounen/pdf/seisyounen/pdf/14_jyakunen/jittaihoukokusyo.pdf)> [2009, April 1]
- 土岐茂, 谷山純子, 衣笠隆幸(2011)「精神保健福祉センターを受診した「ひきこもり」の実態調査」『精神医学』54(4), 339-346
- 内閣府(2010)『若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)報告書』 <[http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf\\_index.htm](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_index.htm)> [2011, April 1]
- 内閣府(2016)『若者の生活に関する調査報告書』 <<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf-index.html>> [2016, December 31]
- 中垣内正和(2004)「ひきこもりを生む社会」『アディクションと家族』21(1), 17-26
- 中垣内正和, 小松志保子, 猪爪和枝, 後藤公美子(2010)「長期ひきこもりにおける心身機能の変化について」『アディクションと家族』26(3), 207-216
- 中地展生(2016)「ひきこもり支援に関する文献展望」『帝塚山大学心理学部紀要』(5), 65-78
- 野中俊介, 境泉洋(2014)「ひきこもり状態が Quality of life に及ぼす影響」『心理学研究』85(3), 313-318
- 福榮太郎, 福榮みか, 野村俊明(2015)「多職種の協働によるひきこもり支援」『臨床精神医学』44(12), 1613-1618
- 文部科学省(2018)『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について』 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/10/1410392.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm)>
- García-Campayo, J., Aldab, M., Sobradiela, N., Abós, B, S(2007)「Un caso de hikikomori en España」『Medicina Clínica』129(8), 8-9
- John W. M. Yuen, Yoyo K. Y. Yan, Victor C. W. Wong, Wilson W. S. Tam, Ka-Wing So, Wai Tong Chien(2018)「A Physical Health Profile of Youths Living with a “Hikikomori” Lifestyle」『International Journal of Environmental Research and Public Health』15(2), 315
- Yoon, L. J., Min, S. J, Tae, C. Y(2015)「Psychopathological Characteristics of Social Withdrawal (Hikikomori) in the Korean」『Adolescent J Korean Neuropsychiatr Assoc』54(4), 549-555